

選択 C 教育の国際化の状況			
	優れた点	更なる向上が期待される点	改善を要する点
平成26年度	○ 国際交流センターが提供する科目のうち、英語による国際教育科目は、「異文化間コミュニケーション」「自己発見と自己表現」「地域研究」といった科目のみならず、「プロテストソング論」「病気のサインと健康：症状の英語による伝え方」「三重の社会と文化」等独自性のある、実践的な内容の科目をそろえている。（三重）		○ 教育の国際化の自己点検・評価に係る情報の流れが複雑であるとともに、教育の国際化に関する取組として実施された事業の成果を、大学として把握する取組が行われていない。（三重）
	◎ 平成26年度に「OPEN-TECH INNOVATION～世界に、地域に、社会に開かれた工科大学構想」が、文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援」に採択され、グローバル化を地域から牽引することを目指している。（京都工芸繊維）	○ 国際科学技術コースでは、すべての授業と研究を英語で行うことができとしているが、英語による授業科目の実施について、更なる充実が期待される。（京都工芸繊維） ○ 留学生への定期的な意見聴取による検証と更なる改善への取組が期待される。（京都工芸繊維）	
	◎ 平成25年4月にブトラ大学（マレーシア）内に海外教育研究拠点MSSCを開設し、ブトラ大学との教育研究交流を活性化させている。また、MSSCに関係する様々な国際交流プログラムを設定し、教育の国際化を進めている。（九州工業） ◎ 海外の各協定校との交流に関する実績報告書を毎年作成し、その結果に基づき、重点交流協定校、交流促進協定校を選定し、交流実績に見合った経費支援を行う仕組みを確立している。（九州工業） ◎ 工学府では平成25年度から英語のみで学位（修士又は博士）を取得できる宇宙工学国際コースを開講している。同コースでは、国連宇宙部（United Nations Office for Outer Space Affairs）（オーストリア）と連携をとりながら、国費留学生を受け入れている。（九州工業）	○ ヨーク大学（イギリス）と連携をとりながら、FDを実施しており、今後、教育の国際化に向けて活発な改善活動につながる事が期待される。（九州工業） ○ 平成24年度末に運用を開始した生涯メールを活用するなど、卒業（修了）した留学生の意見収集等の工夫が期待される。（九州工業）	
平成27年度	◎ 共通教養の「Practical English」を必修化することにより、学生全般の実践的な英語力の引き上げを実現している。さらに、「Practical English」合格者を対象としたより高度な英語力を身に付けるための「Advanced Practical English」を設置することで、学生の学習意欲の向上に寄与している。（横浜市立） ◎ 授業の一環として教員が学生を引率し渡航する海外フィールドワークでは、毎年、大学全体で200人以上の学生が、大学による経済的支援を受けて参加しており、国際的な視野を持った人材を育成するための手段として有効に機能している。（横浜市立） ◎ 国際機関等の協力を得て、主にアジアの各都市が抱える問題や課題の解決を目指すアカデミックコンソーシアム（IACSC）を創設し、都市の抱える課題「環境」「まちづくり」「公衆衛生」等の解決に向け、取り組んでいる。（横浜市立）		○ 外国人学生の受入は、戦略的な取組が不足しているため、近年、減少傾向にある。（横浜市立） ◎ 教育の国際化に関して、学内の取組状況を組織的に自己点検・評価の上、その評価結果をフィードバックするための取組及び体制が十分とはいえない。（横浜市立）
	◎ 平成24年度に文部科学省「グローバル人材育成推進事業」への採択を機に、Kitakyushu Global Pioneers（北九州グローバルパイオニア）を立ち上げ、幅広い学生のニーズ、レベルに応じた様々な教育プログラムを展開し、グローバル人材を育成している。（北九州市立） ◎ 海外協定校の積極的な開拓に取り組むことで、多様な交換留学プログラムを設定し、受入・派遣の双方が適切に機能しており、学生の満足度も高い。（北九州市立） ◎ 国際環境工学研究科が実施している「戦略的水・資源循環リーダー育成（SUW）」事業は、外国人学生を環境リーダーとして認定するとともに、手厚い受入及び支援体制を備えており、当該事業で学んだ修了生は、企業、行政機関や大学・研究分野における基幹的ないし中堅的役割を果たし始めている。（北九州市立） ◎ 国際環境工学部及び国際環境工学研究科では、中国やASEAN地域を対象とした短期留学生受入プログラム「環境未来都市構築のための戦略的エネルギー・環境リーダー育成短期受入れプログラム」を実施しており、毎年60人程度の学生を受け入れている。（北九州市立）	◎ 副専攻プログラムであるGlobal Education Programは、高い英語能力とともに、留学等の海外体験やインターンシップを修了要件としており、今後の成果が期待される。（北九州市立）	○ 平成27年度においては北方キャンパスには外国人学生が入居できる寮がないなど、受入学生をサポートする施設・設備が十分でない。（北九州市立）
平成28年度	◎ 副学長（企画・国際担当）の配置による国際化分野でのリーダーシップの確立、留学生・国際交流委員会による全学への共有体制、国際センターによる恒常的な事務執行体制、アメリカ・中国等5か所の海外拠点により、国際化事業の推進体制を確保している。 ◎ 国際化に対応することを可能とした組織と体制が整備されてきているが、とりわけアメリカ、中国、モンゴルに海外拠点を整備し、留学生募集、試験実施等の積極的な活用を図っている。 ◎ 海外ネットワークへの積極的な参加や新規協定校の開拓により、平成25～27年度の年間平均で620人の外国人学生を受け入れている。 ◎ 国内学生・外国人学生混住の「国際寮」及び「第二国際寮」（定員計329人）を設置し、レジデント・アシスタントによる日常的な国際交流を図っている。 ◎ 中国については渡日前入試を実施し、学生の負担の軽減と受験者の確保を図っている。 ◎ 数多くの派遣留学プログラムを展開しており、平成25～27年度の年間平均では学士課程で650人、大学院課程で3人の学生が留学している。 ◎ 短期海外派遣学生の単位修得率が、科目ナンバリング制度を活用した厳密かつ効率的に加えて安定的な単位認定によって、平成25年度が96.3%、平成26年度が97.4%、平成27年度が96.5%と高い。 ◎ 海外派遣学生については申請時に「ストレス耐性度チェック」及び「医療情報フォーム」を提出することを義務付け、記載内容に応じて面談を行うなど学生派遣について配慮を行っており、場合によっては英文の診断書を持参させる指導も行っている。 ◎ 学生による留学ピアサポート組織である「Global Supportes」を発足させ、海外派遣の支援や国際交流イベント等を企画・実施しており、平成27年度の構成員は128人である。 ◎ 大学の目的に即して教育の国際化の進捗を点検・評価した結果に基づき、独自の教育目的を持つグローバル・コミュニケーション学群の設置を実現している。（桜美林）	◎ 国際的なネットワークの活用について一層の取組が期待される。 ◎ ダブル・ディグリープログラム及びジョイント・ディグリープログラムについて一層の取組が期待される。（桜美林）	